

岡山県下の方言分布について

—分布パターンの諸相—

吉 田 則 夫

はじめに

岡山県下の方言分布については、従来、県内の地域差はさほど大きなものではなく、備前、備中、美作の旧国域に対応して、緩やかな差が認められるとするのが通説であった。^(注1)

しかしながら、方言の分布や区画を論じるうえで必須の、県下全域を対象とした言語地理学的調査を踏まえた言説とは言い難いのが実情である。岡山県下の方言分布については、言語地理学的調査に基づく実証的知見が求められている。本稿は、『中国地方五県言語地図』^(注2)における岡山県域の言語地図を駆使して、岡山県下の方言分布の実証的究明を目指すものである。

1 『中国地方五県言語地図』の資料的価値

岡山県下の方言分布を究明するうえで、『中国地方五県言語地図』が最適のものとする根拠は以下の諸点にある。

まず第一に、本言語地図のデータが、農山漁村を含む全国津々浦々まで生活文化が大きな変貌を遂げることになった高度経済成長期以前の調査であること。網野善彦が指摘するように、歴史的観点からみて、日本社会は高度経済成長期の以前と以後とで大きく変貌している。^(注3)

第二に、本言語地図は、岡山県を含む中国地方5県全体の方言分布が見渡せる言語地図であること。とりわけ、岡山県と県境を接している広島県、鳥取県の方言分布状態との影響関係を見ることができること。^(注4)

第三に、本言語地図の岡山県のデータは、中国5県調査の初年度の調査であること、しかも、著者廣戸惇氏単独の、ほぼ一年間の調査によるものであること。^(注5)

以上の三点において、本言語地図は、岡山県下の方言分布を究明するうえで最適の資料と判断することができる。因みに、岡山県全域の言語地図の総数は360余図、岡山県内の調査地点は76地点で、いずれも『日本言語地図』『瀬戸内海言語図巻』『方言文法全国地図』を凌いでいることを付言しておきたい。

2 調査項目と言語地図について

『中国地方五県言語地図』は次のような調査票による調査結果をデータとしたものである。

調査には第一調査票と第二調査票の二冊を使用した。(中略) 第一調査票の調査項目(標題)数は岡山県に入った当初は420、岡山県調査の途中から必要を感じて調査に加えたもの80、計500項目である。(中略) 本書に採録した地図ならびに解説は、現地直接調査の第一調査票500項目のうちの390項目である。

(『中国地方五県言語地図』序)

上記の390項目はFig.1 ～ Fig.390として地図化されている。うち、〔地図なし〕のものが36項目あり、他方、同一項目が2枚以上の図で表されているものが18項目あって、地図の総数は384図である。なお、岡山県域の言語地図が空白、もしくは部分のものが19図あり、差し引きすると岡山県全域をカバーする言語地図の実数は365図である。

これらの大半は語詞の分布図であり、音声・音韻や文法の項目ではないことが、結果的に、県内の市町村レベルの俚言の分布状況をつぶさに記録するものとなっている。

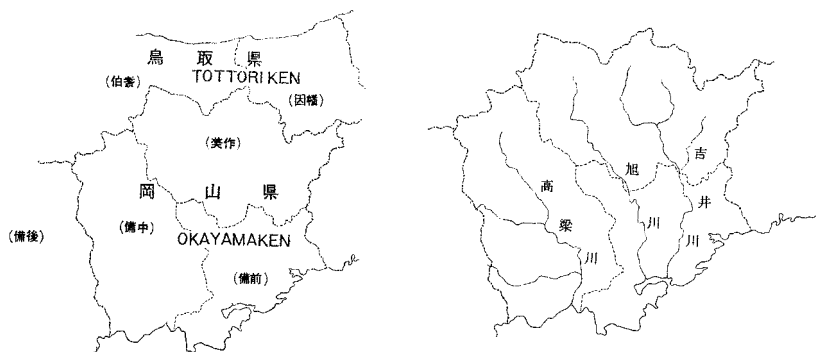
3 分布パターンの諸相

『中国地方五県言語地図』の岡山県域の事象分布から帰納された岡山県下の方言の分布パターンの諸相を順次とりあげる。これらの分布パターンを総合し統括するいとなみが、岡山県下の方言分布の究明にかなう課題であるが、そのための基礎作業として、本稿では分布パターンの諸相を整理することを当面の目的とする。

以下、それぞれの分布パターンについて、典型的な図を2例ずつ掲出する。

なお、言語地図とその番号は原典のままとし、各図の凡例については、必要の事象を、適宜、取捨選択して、原典の符号とともに掲出した。

はじめに対象地域の概念図を掲載する。



a 旧国域に相当する三つの地域がほぼ区画を成している分布

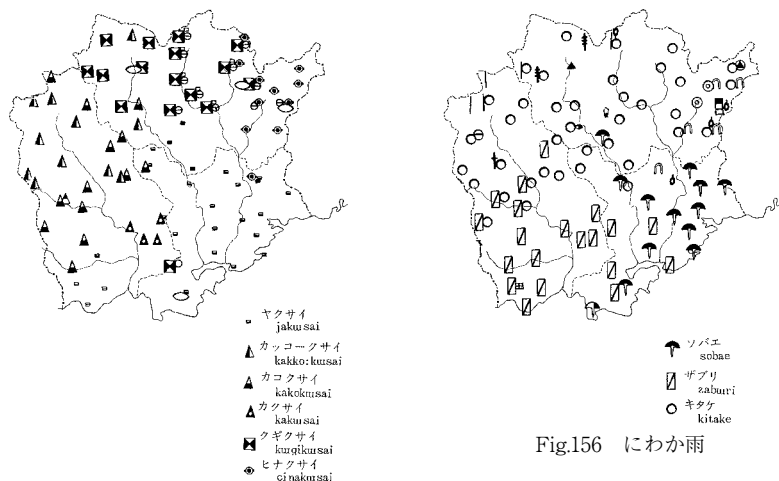


Fig.156 にわか雨

Fig.327 布・綿などの焼けるにおい

Fig.327では、ヤクサイ（備前）／カッコークサイ・カコクサイ・カクサイ（備中）／クギクサイ、ヒナクサイ（美作）が三者、ほぼ対立的に分布している。Fig.156では、ソバエ（備前）／サグリ（備中）とが対立し、キタケ（美作）が備中北部と連続しているものの、三地域対立分布の様相を呈している。

b 旧国域の特定の一国に分布

備前、備中、美作のいずれか一国のほぼ全域に分布するもの。

b-1 備前域分布

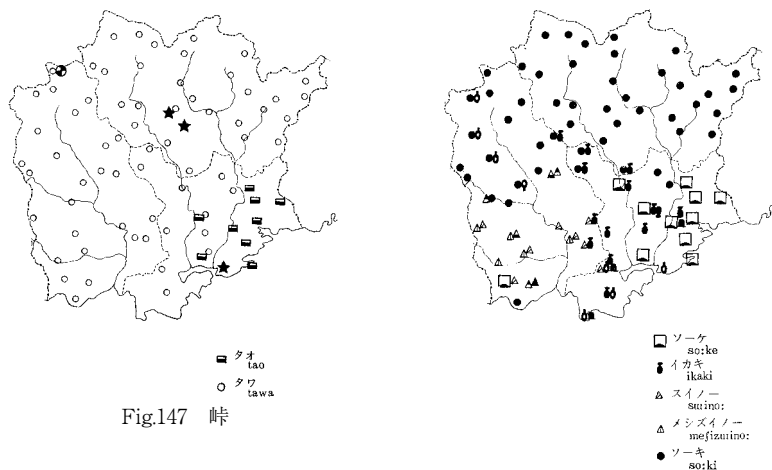


Fig.147 峠

Fig.205 笊（ざる）

Fig.147のタオ、Fig.205のソーケとイカキは、備前域にのみ見られる事象。

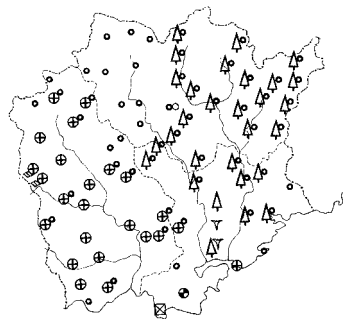
とくにイカキは中国5県全図のうちで、この地域だけに見られる事象。

b-2 備中域分布



- ◇ カワラスズメ
kawasuzume
- ◆ カーラスズメ
ka:rasuzume
- ♣ カワラシヨート
kawara:jo:to:
- ♣ カワラジョートー
kawarajo:to:
- ♣ カワジョートー
kawajo:to:

Fig.1 せぐるせきい

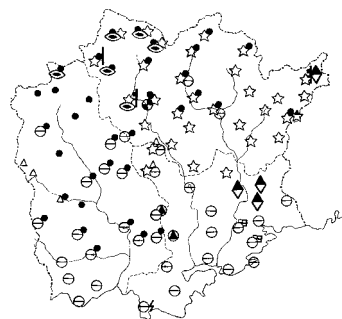


- ヨイマツリ
joimatsuri
- ⊕ エーマツリ
comatsuri
- ▲ ウラマツリ
uramatsuri

Fig.284 祭りの前夜

Fig.1のカワラシヨート・カワラジョートー・カワジョートーは、中国5県全図のうちで、この地域だけに見られる事象。Fig.284のエーマツリは、備中の他には中国5県で島根半島に6地点見られるのみ。

b-3 美作域分布



- テンビンボー
tenbimbo:
- ☆ ザルボー
zarubo:
- ☉ カタギボー
katagibo:
- オーコ
o:ko

Fig.181 天びん棒



- ♣ テノクボ
tenokubo
- ♣ ウスモト
usumoto
- オテイレ
oteire
- ⊕ オテイト
oteito
- | トリツケ
tori tsuke

Fig.215 搗くとすぐ外に餡・きな粉などをつけて食う餅

Fig.181のザルボー、Fig.215のテノクボとウスモトが美作に分布している。テノクボは中国5県全図のうちでこの地域だけに見られる事象。ウスモトは因幡から連続分布している事象であるが、備前、備中には見られない。

c 県西部から東部への伝播

本資料から帰納される県内方言の伝播の傾向で、もっとも顕著と言えるのは、県内の西から東への事象の伝播（東進）である。しかもそれは河川や旧国境などの地理的条件によって伝播状況の漸移層が認められる。

c-1 高梁川以西の分布

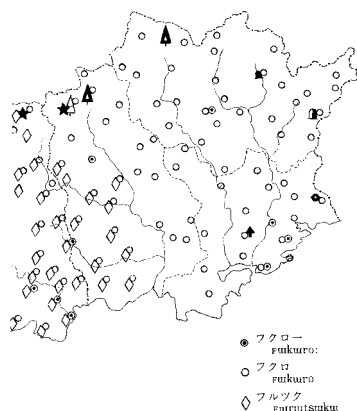


Fig.10 梟（ふくろう）

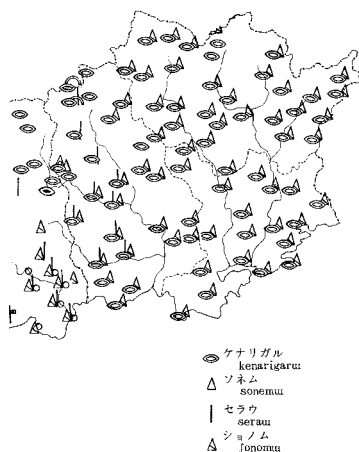


Fig.324 羨む

Fig.10のフルク、Fig.324のセラウ、いずれも備後からの連続分布。

c-2 備前・備中国境以西の分布

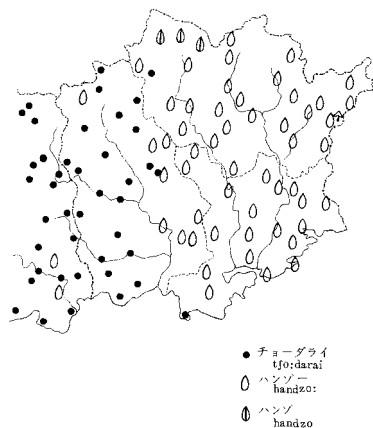


Fig.200 足のある手桶

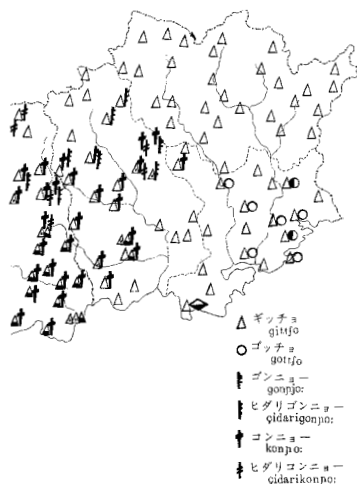


Fig.262 左利き

Fig.200のチョーダライ、備後からの連続分布。Fig.262のゴンニョー・ヒダリゴンニョー、コンニョー・ヒダリコンニョーが備前・備中国境にまで達し

c-3 旭川以西の分布

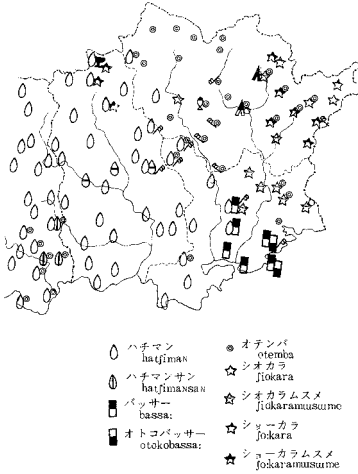


Fig.237 おてんば



Fig.195 牛が発情して騒ぐ

Fig.237のハチマン、広島県からの連続分布。Fig.195のハヤリは出雲、伯耆からの連続分布。

c-4 吉井川以西の分布

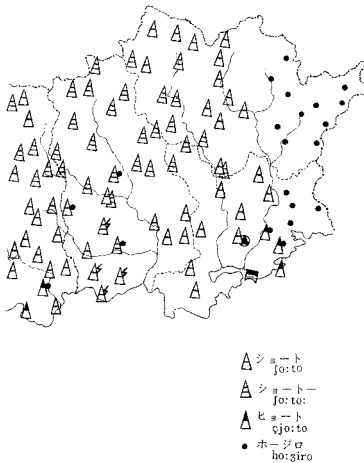


Fig.4 ほおじろ



Fig.139 日陰地

Fig4のショート、備後からの連続分布。Fig.139のオンジ、広島県及び出雲からの連続分布。

c-5 吉井川以東への分布

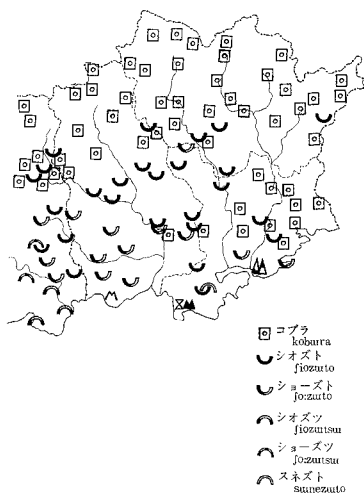


Fig.249 腓 (こむら)



Fig.27 蜘蛛の糸

Fig.249のシオズト・ショーズト、備後からの連続分布。Fig.27のエギ、備後及び出雲からの連続分布。

d 県南と県北の対立分布

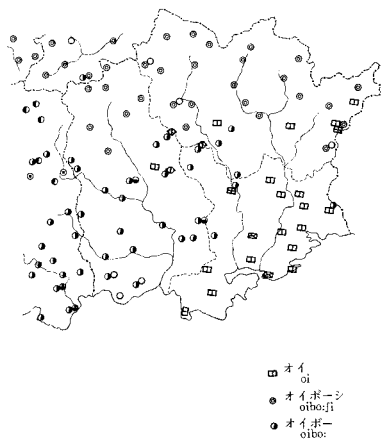


Fig.239 甥 (おい)

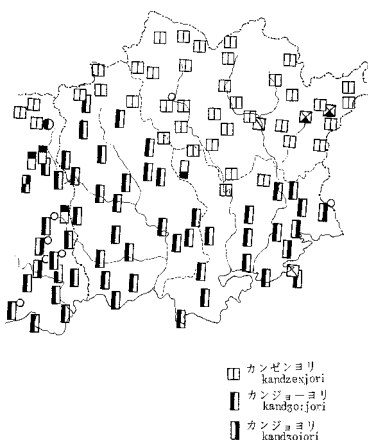


Fig.298 こより

Fig.239では、県南部のオイボーと県北部のオイボーシとが対立分布している。備後全域に分布しているオイボーが備中南部に侵入し、さらに国境を越えて南北対立の分布となったとみられる。Fig.298では、県南部のカンジョーヨリと県北部のカンゼンヨリとが対立分布している。広島県全域にカンジョーヨリがみられ、その勢力が岡山県に侵入して県南部のカンゼンヨリを北

へ押し上げたものとみられる。南北対立の分布は、総じて、備後からの事象が岡山県南部に侵入して在来の事象を駆逐した結果、もたらされたものが多い。

e 備南分布

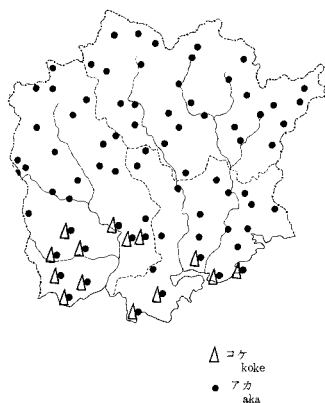


Fig.243 垢（あか）

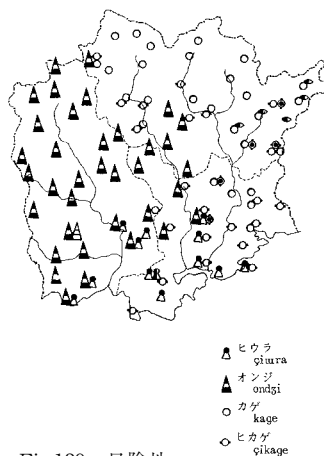


Fig.139 日陰地

Fig.243のコケは備前の沿岸部及び備中南部に分布している。またFig.139のヒウラは、中国5県のうち、備前南部及び備中の南部に分布している。いずれも備前備中の沿岸に近い南部に連続して分布している。

f 美作東部分布

美作東部、播磨と県境を接する英田郡、勝田郡の連続する9地点にわたって際立つ分布が見られる。



Fig.85 すいば

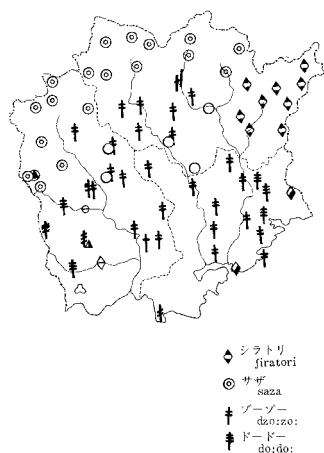


Fig.118 醤油のかび

Fig.85のギシ、Fig.118のシラトリは、9 地点すべてが同一事象の分布である。しかもそのいずれもが中国5県のうちで、ほぼこの地域にだけに見られる事象である。従って、この地域が局所的な分布特徴を見せていると言える。

g 備前東部分布

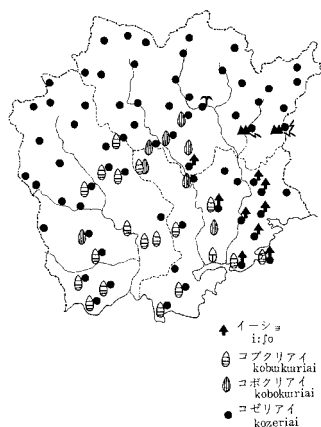


Fig.303 小さい争い

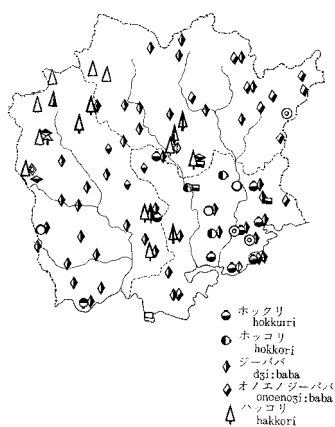


Fig.97 春蘭

Fig.303のいーしょは、備前東部の吉井川以東にまとまった分布を成し、中国5県のうちでこの地域にのみ見られる事象である。また、Fig.97のホックリは、備前東部の吉井川以東に5地点の連続分布が見られる。この事象も中国5県のうちでこの地域にのみ見られる事象である。

h 播磨接境域分布

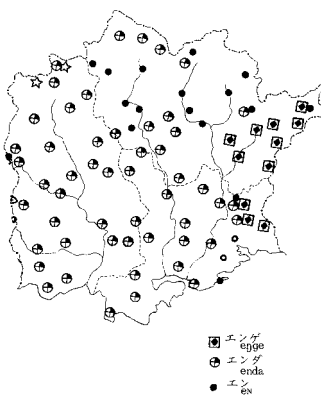


Fig.165 縁側

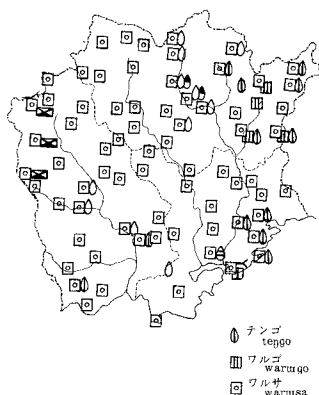


Fig.236 悪戯 (いたずら)

備前と美作の、播磨との接境地帯に連続して分布しているもの。Fig.165のエンゲ、Fig.236のテンゴは、播磨からの伝播によるものと見られる。

i 井笠地域分布

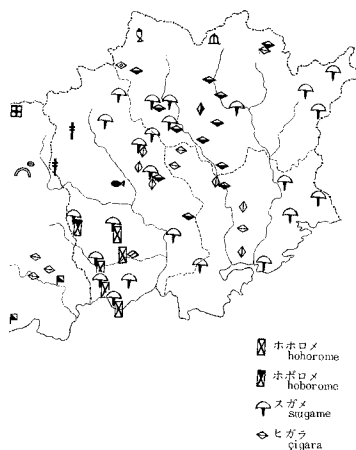


Fig.259 近視で目を細めてみる目

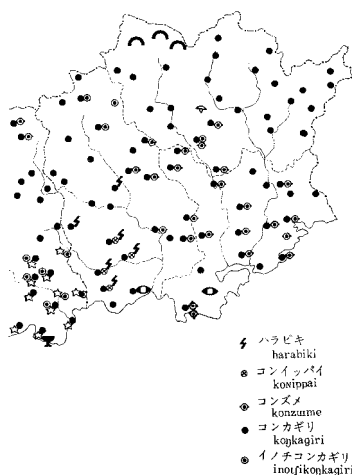


Fig.293 一所懸命

Fig.259のホホロメ・ホボロメ、Fig.293のハラビキ及びコンイッパイは、井笠地域に纏まって分布し、西隣の備後からの侵入ではない。しかもいずれも中国5県全図のうちで、ここだけに見られる事象である。従って、この地域独自の局所的な分布と言える。

j 備後圏域分布

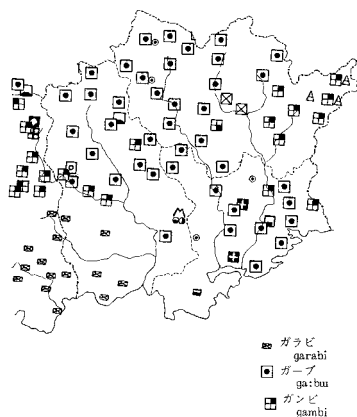


Fig.82 山ぶどう

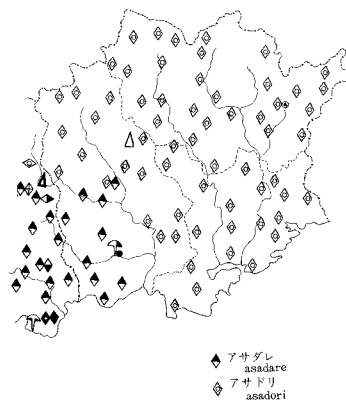


Fig.76 秋ぐみ

Fig.82のガラビは、岡山県の井笠地域と広島県の備後東南部が連続分布している。中国5県全図でこの地域にだけ見られる事象である。また、Fig.76のアサダレは、井笠地域と備中・備後の接境地帯に連続分布している。これらは井笠地域から国境を越えて西へ伝播したものと考えられる。いずれにし

でも井笠地域と連続する備後圏域としてのまとまりが認められる。

4 自然地理的環境及び人文地理的環境と方言分布

4-1 三大河川と方言分布

岡山県は、東から吉井川、旭川、高梁川の三大河川が瀬戸内海へ注いでいる。言語地理学の知見では、大きな河川の流域には、上流域、中流域、下流域にわたって、関連事象の分布が認められるのが通例である。その観点から、本言語地図の岡山県域について三大河川の流域に沿った言語事象の分布を点検してみたところ、意外にも、河川の流域に沿う分布を見せる地図は少なかった。もっとも、上流域、中流域、下流域のそれぞれの範囲内では、事象の関連分布が認められるケースがあるが、河川の全域にわたるような事象の関連分布を見せる図は少ない。むしろ、三大河川の存在は、c-1、c-3、c-4に見られるように、岡山県の西から東への事象伝播の漸移層の形成に関わっていると言えよう。このことは、岡山県下の方言分布の特質の一つに挙げられよう。

4-2 古街道と方言分布

いわゆる古街道が現代の方言分布に関わっているのかを出雲街道を例に検証してみたい。県北を東から西へ横断している出雲往来に相当するのは、本資料の調査地点番号では、28新庄、29美甘、34勝山、35久世、44坪井下、43津山、49勝間田、56土居の8地点を結ぶ線上である。本言語地図において当該地帯の事象分布を総点検してみたが、出雲往来に沿うような方言事象の分布は認められなかった。

5 おわりに

岡山県下の方言分布は、分布パターンの諸相を整理することによって概ね次のような傾向性が認められる。

- 1) 分布傾向の第一は、西と東の対立で、備後から伝播した西の事象が、漸移的に東進する傾向が認められる。
- 2) 分布傾向の第二は、県南と県北の対立で、西から伝播してきた県南の事象が北上する傾向があり、概して、県北には古態の事象、ないし伯耆、因幡に連なる事象が認められる。
- 3) 備前、備中、美作の三つの旧国が、互いに対立して分布しているという事象は、必ずしも多いとは言えない。
- 4) 備中南部の井笠地域には、独自の事象分布が認められ、さらに備後東南部との連続性も認められる。

本稿は、『中国地方五県言語地図』をつぶさに読解することによって、岡山県下の方言分布のパターンをスタティックに整理したものである。これら

の分布パターンを総合し統括する量的・質的検討は別に稿を改めたい。

(注1) 吉田則夫編『岡山県のことば』(「日本のことばシリーズ」33 2018 明治書院)

(注2) 廣戸惇著『中国地方五県言語地図』(1965 風間書房)

(注3) 歴史学者の網野善彦は鶴見俊輔との対談で次のように述べている。

鶴見 網野さん、日本史の学者は「二十世紀」という単位を考えますか。

網野 私はあまり考えないですね。私などはむしろ日本については高度成長期の以後と以前とにわけてしまいますね。長い射程で考えると、ここで社会はずいぶん違っていると思いますよ。(『歴史の話』2004 朝日新聞社)

(注4) 東接する兵庫県播磨地方の方言分布状態が見られないこと、また岡山県島嶼部のデータが無いことは惜しまれる点である。

(注5) 「昭和30年7月、(中略)岡山県真庭郡に入ったのが本調査の第一歩であった。

(中略)岡山県真庭郡川上村が本調査をはじめた最初の地点になった。岡山県は同年夏、秋、さらに31年春までに調査を終えた。」(『中国地方五県言語地図』序)

(本学名誉教授)